

太陽誘電株式会社
2025年3月期第3四半期決算説明会 質疑応答要旨
(2025年2月7日開催)

- Q1. 前回想定(2024年11月時点)と比較した第3四半期の営業利益増減要因、および第4四半期の営業利益予想の背景は。第3四半期は「その他」という項目が14億円の減益要因となったが、それを除けば営業利益は想定通りだったのか。また、在庫計画に関して前回予想から変更はあるのか。
- A1. 「その他」は前回の想定には入っていなかった。複合デバイスに含まれる通信用デバイスの売上低迷による棚卸資産の引当金増加や、期末の為替レートが円安であったため在庫引当金が増加したことによるものである。それ以外は、ほぼ想定通りであった。
第4四半期に関しては、前回想定からコンデンサを中心に売上予測を引き上げ、コンデンサの稼働率が前回想定70%前後から80%前後に上昇することで操業度効果が出てくると想定している。為替に関しても前回想定から円安方向に変化しており、増益要因となる見込み。
在庫(注1)に関しては前回予想から変更なく、通期で100億円の増加を見込む。上期で100億円積み上げており、下期は増減なしという計画である。
- Q2. コンデンサの来期の能力増強と稼働率の見込みは。値下がりやや緩やかな状況とのことだが、来期以降の動向をどう見ているのか。また、構造改革を行う通信用デバイスの黒字化タイミングは。
- A2. コンデンサの能力増強は前期比+10~15%という計画だったが、来期は5%程度に抑えることを考えている。全社の設備投資額は、今期の減価償却費として予想する460億円の範囲内に抑制する方向で検討している。来期の計画は現在策定中のため、コンデンサの稼働率についてまだ具体的な回答はできない。
来期は全体的に需要が上がってくると考えており、値下がり率は比較的安定すると想定している。通信用デバイスに関しては、できるだけ早期の黒字化を目指している。構造改革を実施して固定費を削減し、売上に見合った水準まで下げるとともに、新商品を投入して利益率の改善を図っていく。
- Q3. コンデンサの売上高は、第2四半期から第3四半期、第4四半期にかけてほぼ同水準という計画である。季節性がなくなっているようだが、その背景は。また、インダクタの第3四半期の売上高は前回の想定では第2四半期に対して減少を見込んでいたが、増加した要因は。来期も伸ばしていけるのか。
- A3. コンデンサは、第3四半期に情報機器や通信機器、自動車向けの売上が増加した。第4四半期は通信機器向けが減少するが、それ以外の用途での増加を見込んでいる。インダクタは、DDR5のメモリーモジュールなど情報機器向けが伸びており、今後もその傾向は続くと想定している。
- Q4. 設備投資を抑制し、コンデンサの生産能力増強ペースを落とすとのことだが、今後の積層セラミックコンデンサ(MLCC)市場全体の成長シナリオをどう想定しているのか。また、前期に建設した中国工場の稼働状況について教えてほしい。
- A4. 2021年度からスタートした中期経営計画2025において、コンデンサは年率10~15%の能力増強計画を立てた。当初は力強い需要の伸びを見せたが、この2年間ほど需要が伸び悩んでおり、当社の生産能力が需要より高い状態になり稼働率が低迷する一方、投資が先行したことによる固定費の増加が利益を押し下げている。
今後の市場成長に関しては、次の中期経営計画の中で精査したい。需要拡大に関しては数年間

先送りとなってしまったが、今後また上がっていくと想定している。MLCC 市場全体で 10%弱程度は伸びていくのではないかと見ている。来期の設備投資は大型形状・大容量など需要が強いアイテムのボトルネック工程に集中的に投下する。

なお、工場ごとの稼働状況は開示していないため、回答を控える。

Q5. 市況が改善していると感じられるが、前回予想との違いやその背景を教えてください。

A5. AI サーバーに関しては引き続き旺盛な需要が続いており、今後も高い成長を続けると見ている。汎用サーバーも在庫調整が一巡したと見ている。自動車市場は、一時期バッテリーEV の低迷などで調整が生じていたが、xEV 化や ADAS の高機能化による需要拡大が再び見えてきた。

Q6. 通信用デバイス事業においては、構造改革により収益体質の改善に取り組むとのことだが、数年前と比較して競争環境そのものが変化してきているのではないか。今回の構造改革で十分な対策となるのか。

A6. 来期の需要動向に関してはある程度見えてきており、それに対応する構造改革で対策しつつ新商品の開発を進めながら事業の再構築を目指す。顧客層が偏っていることを認識しており、安定化まではまだ時間がかかると想定している。その間に市場の大きな変動が生じた場合には、様々な選択肢を排除せず考えていく。

Q7. 第3四半期の減益要因のうち、「その他」という項目で発生した 14 億円の詳細を教えてください。第4四半期以降も同様の費用が発生する可能性はあるのか。

A7. 「その他」は、複合デバイスに含まれる通信用デバイスの売上が低調な中で在庫評価損と、期末日の為替レートによる会計上の評価影響が入っている。事業規模がさほど大きくない複合デバイスに与えたインパクトは大きかったが、それ以外の製品にも影響があった。

第4四半期は、現在の為替前提であれば同様の費用が発生することはないと見込んでいる。

Q8. 新製品の開発状況を教えてください。例えば、コンデンサの誘電体薄層化や内部電極に銅を使用した製品など、次にどのようなものを出していきたいと考えているか。

A8. コンデンサの技術開発において、当社は小型化と大容量化の両面で進化に取り組んできた。引き続き、最先端品の開発に力を入れていく。かつてはスマートフォンが技術進化を牽引して小型化が進んできたが、ここに来て AI サーバー向けに大形状・大容量の商品の需要が高まっている。大形状・大容量タイプは製造工程の負荷も高く、供給メーカーも限られているため、技術優位性が活かせる分野だと考えている。今後、AI 機能がサーバーだけでなく PC や自動車などに展開されていくと、さらなる広がりがあるのではないかと考えている。

コンデンサの誘電体薄層化は、小型化と大容量化にも貢献するが、高信頼性という点でも効果があり、自動車などに加えて航空・宇宙分野などさらなる信頼性が求められる市場に対応できると考えている。また、内部電極に銅を使用したコンデンサは基地局通信装置など高耐圧が求められる機器で採用されているが、市場として大きな広がりはまだない。

インダクタに関しては、材料に金属磁性体を使用したメタル系インダクタに注力している。小型品が最先端スマートフォンに採用されたことから始まり、今は DDR5 のメモリーモジュールにも多数使われるようになった。今後は PC やサーバーの電源回路分散化や垂直給電化が想定されており、メタル系インダクタの需要がさらに高まっていくと想定している。

注1:在庫増減額は、為替や利益に影響がない部分を除いた実態ベース

※当資料に記載されている、当社(太陽誘電株式会社、および当社グループ)に関する計画、業績見通し、戦略、確信等のうち、将来の記述をはじめとする歴史的事実ではないものは、すべて現在、当社が入手している情報に基づいて行った予測、想定、認識等を基礎として記載しているものであり、その性質上、客観的に正確であるという保証、ならびに将来その通りに実現するという保証はありません。実際の業績は、数々の要素により、現状の見通し等とは大きく異なる結果となりえ、かつ、当社が事業活動の中心とするエレクトロニクス市場は変動性が激しいことから、当資料に全面的に依拠することはお控えくださるようお願いいたします。